札幌学院大学人文学会紀要（2017）第102号　31－51

《論　文》

匈奴の建造物・住居

臼　杵　　勲・佐　川　正　敏・松　下　憲　一

要　旨

遊牧国家を建設した匈奴の領域では，遊牧生活的ではない定住的な城郭や集落が形成された。本稿では，匈奴国家の実態を探ることを目的に，それらの構成要素である建造物を取り上げ，その内容を示し，それらが匈奴国家に導入された系譜を明らかにすることを目的とした。

匈奴の建造物は，平地式と竪穴式の二種に区分された。平地式については瓦の使用などから漢代中国建築の影響が強いが，一部に西方の中央アジアの影響がうかがえることを指摘した。また竪穴式については，中心部ではなく中国の北辺からの影響を想定した。また，中国からの技術導入，中央アジアとの関連については，歴史史料にも，関連する記述があることを確認した。また，このような技術導入は，匈奴国家が,国家経営上，組織的意図的に実施した可能性が高いことを指摘した。

キーワード：匈奴，遊牧国家，定住集落，建造物

はじめに

紀元前３世紀から紀元２世紀頃にかけて内陸アジアに広域にわたる遊牧国家を建設したことで知られる匈奴において，遊牧生活に不可欠な移動式住居以外に，城址や宮殿址，さらに定住集落や常設される住居などの非遊牧文化的な土木建築物も存在したことが知られている。それらの構成要素である建造物・住居は，匈奴の文化本来の所産ではなく，匈奴の領域に移住した漢人や中央アジアの農耕民によるものとする考え方が主流であった。また，実際に確認された城址や集落址もバイカル湖周辺などの北寄りの地域に少数が知られたのみであり，遊牧を生業の主体とする匈奴の文化においては，これらも農耕と同様に本来異質な要素であると考えられることが多かった。しかし，近年モンゴル国内において，外国との共同調査例が増加し，特定地域の悉皆的調査も行われるようになると，匈奴時代の城址や集落址の発見・確認が増加し，分布地域もモンゴル国中央部・東部・南部とひろがり，匈奴国家の領域においても必ずしも例外的な存在ではないこ

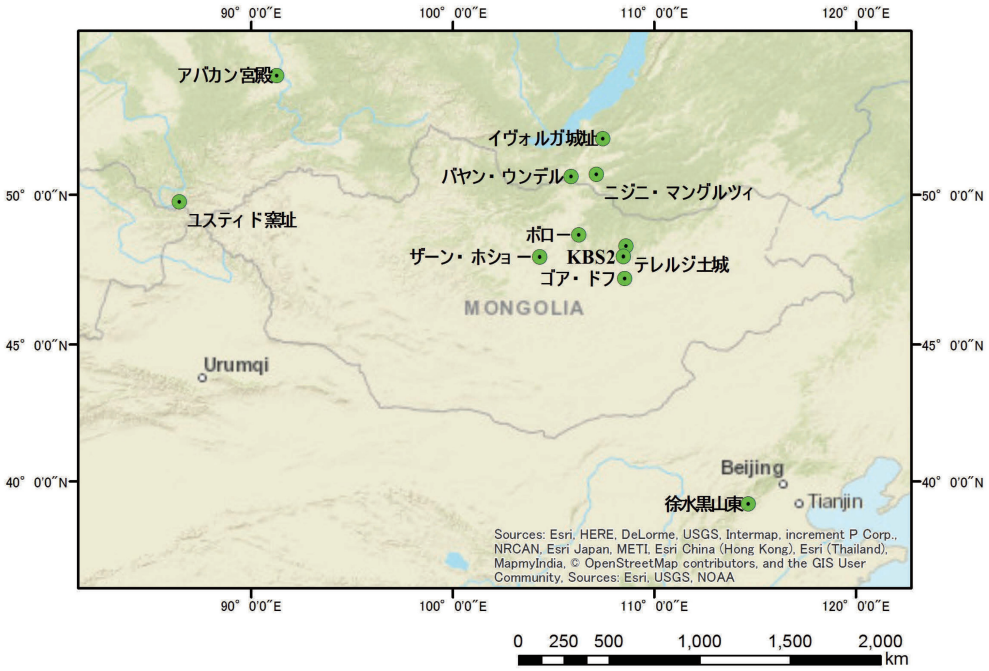


図１　関連遺跡分布

とが知られてきている。

以上のような現状をふまえると，遊牧集団としての「匈奴」ではなく，遊牧国家としての「匈奴」という観点から各種生産地・定住集落・城址の意義を再考することが必要になるものと考えている。本稿では，それらの構成要素である匈奴の使用した建造物について，その実態を明らかにし，それらの系譜を考察しようとするものである。

筆者らは，2014年度よりモンゴル国トフ県ホスティン・ボラク遺跡群において匈奴の生産遺跡群の調査を継続している。対象遺跡周辺には，同時期の複数の城址遺跡や製鉄工房址が存在し，匈奴国家の政治・経済拠点の一つと思われる。近隣には，農耕活動などにも従事した集落も存在した可能性があると考えている。そしてここにおいて，窯業生産と関わる施設と思われる遺構を確認した。この遺構が恒常的な使用のための一種の建造物であるのかの検証も，建造物の事例との比較から併せて行いたい。なお，各章の執筆は１・３を臼杵，２を佐川，４を松下が担当した。

１．匈奴の建造物の類例と特徴

（1）建造物の類例

まず，匈奴に関わる遺跡として認識され，内容が詳しく確認されている建造物・住居址の類例について述べ，それらの内容から，匈奴の建造物の特徴を明らかにすることとする。ロシア連邦，

モンゴル国領内で以下の事例が知られている（図１）。なお，歴史的には匈奴が居住したことが明らかな中国領内においては，匈奴の建造物と確定される事例は存在しない。

① ロシア連邦ハカス共和国アバカン市居館址（Киселев 1956, Кызрасов 2001：図２）

南シベリアのアバカン市（г.Абакан）で発見された大型建物址である。1940年に道路工事建設に際して発見され，翌年に発掘調査が開始され，大戦による中断を経て，1945・46年に本格的に調査が実施された。その後，成果の概要はキセーリョフ（С.В.Киселев）により紹介された（Киселев 1951）。日本でも早くからその発見が紹介され，「李陵の宮殿」という表現とともに日本でも注目されてきた（平井 1951，角田 1971，護 1955）。

建物は，エニセイ川の支流であるアバカン川とテシェベ川にはさまれた平坦な草原に立地し，小高い高まりとなっている場所で発見された。主に版築による厚さ約２ｍの壁をめぐらして建てられ，東南部が道路建設により破壊されているが，ほぼ方位に合う45×35ｍの長方形の平面プランを持つ，東西棟である。建物基壇はなく，地山に直接建てられていた。内部には壁により20室の部屋が仕切られ，各部屋の壁・隅に壁柱列が並ぶ。中央に他より広い広間が設けられ，壁も厚く仕上げられている。柱の規模や配列からは，柱組のみで屋根を支える構造とは考えにくく，土壁で屋根組を支えた壁建ち構造と思われる。床下には煙道をめぐらした暖房施設が築かれ，その後床土が敷つめられていた。西南隅の部屋では，この煙道に暖気を送るかまどが設置されていた。各部屋の壁には開口部が設けられ，扉設置のための溝が切られた部分もあり，木製の扉が設置されたらしい。扉の開閉に用いたと思われる舗首も出土している。なお開口部の幅が壁の両側で極端に違うものもある。建物内外から大量の瓦が出土し，瓦葺屋根であったと考えられる。出土瓦中には「天子千秋萬歳常楽未央」の銘文を持つ瓦当も存在した。その他に文様塼も出土している。入口が南壁中央に設けられた平入と考えられている。中央部を重層にした入母屋か寄棟式の屋根が想定されている。建物の規模や屋根・床等の装飾性から見て，宮殿建築の一種と考えられる。発掘時に出土した土器が匈奴様式であることから，匈奴に関連する建造物と判断された。

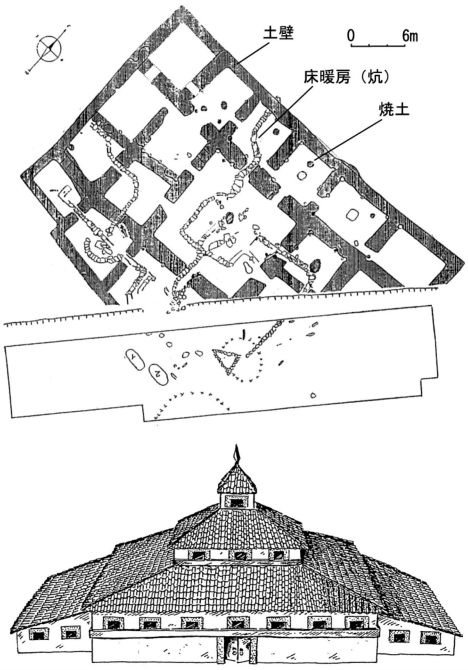


図２　アバカン居館址遺構・推定復元図
（Кызрасов 2001 рис4, рис54）

この建物については，瓦の存在などから，中国式建物，あるいは中国人による建造と推定されて，匈奴に帰順した前漢の将軍の李陵により前漢代に建造されたとする説が出されていた。「李陵の宮

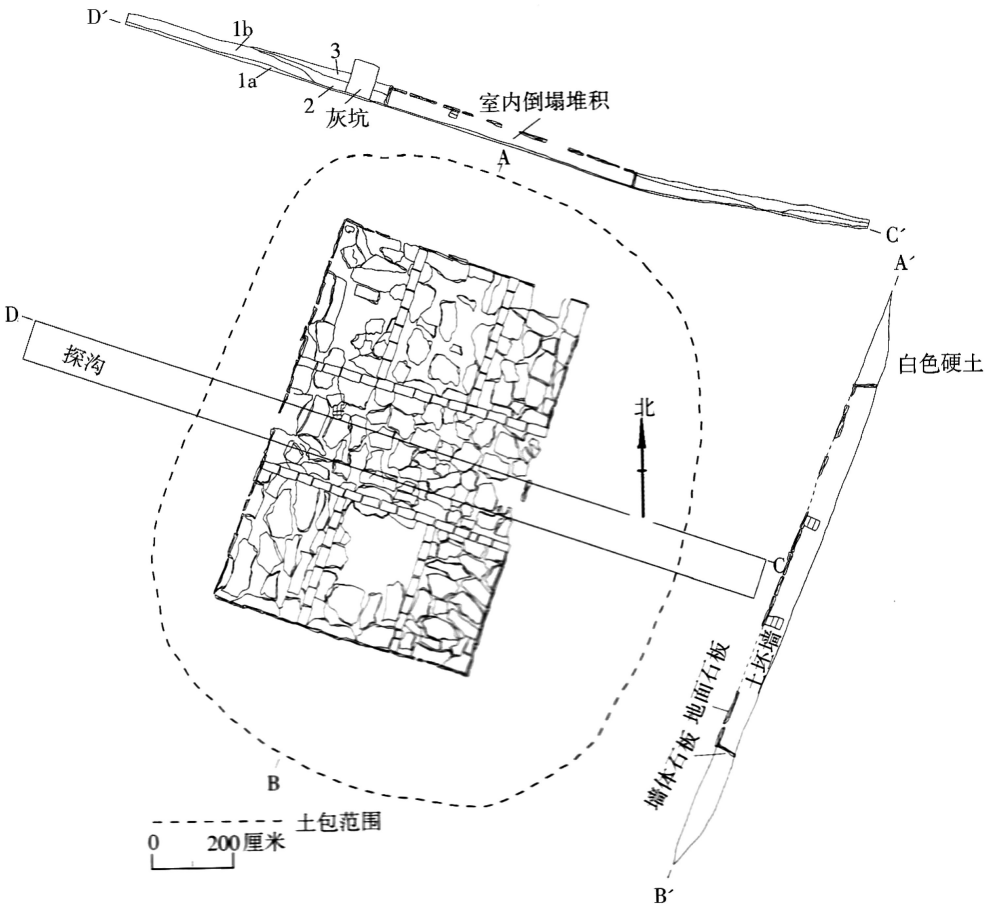


図３　ザーン・ホショーⅡF1住居址

（内蒙古自治区文物考古研究所他2015　図二九）

殿」説は，李陵が匈奴国家の西部を統括する右賢王に封ぜられたとの記事に基づいている。しかし，その後瓦当の銘文から，新王莽代の紀元１世紀ころの建造であることが確定し（ヴァインシュテイン・クリュコフ 1985），この説は否定されている。また，このアバカン市周辺地域はモンゴル高原を中心とする匈奴本来の領域ではなく，西にはずれた南シベリアに位置しており，文献上の「堅昆」の領域とされる（角田1971 p.84）。匈奴国家の政治的拡大により併合された地域と考えられるため，建物の目的・機能についても検討が必要である。

②　モンゴル国ブルハン県ダッシンチレン村ザーン・ホショー（Заан хошуу）遺跡（内蒙古自治区文物考古研究所・蒙古国游牧文化研究国際学院　2015:図３）

モンゴル国中央部，トーラ川流域の草原部に位置する。2014年６～７月にモンゴル遊牧文化国際研究所と内蒙古文物考古研究所の共同調査により発掘が行われた。遺跡は湿地帯に面したゆるやかな斜面上に位置する。円形の高まり上に遺構が存在する１号地点と，方形の土塁がめぐる

２号地点の２地点が確認された。両地点は，約640ｍ離れている。１号地点では，長径約25.6ｍの楕円形の盛土の中央に，四辺がやや東に傾く10.5×7.5ｍの方形半地下式のＩＦ１住居址が検出された。南東部を中心に破壊を受けているが，おおよその特徴は把握された。北東隅にかまどが設けられ，北・西壁に煙道がめぐり，暖房施設とされている。一部に板石が残り，本来は板石組の煙道であったと思われるが，破壊のためはっきりしない。壁際に３ヶ所壁柱の存在が確認された。床は約３cmの厚さで黄白土が敷かれていた。

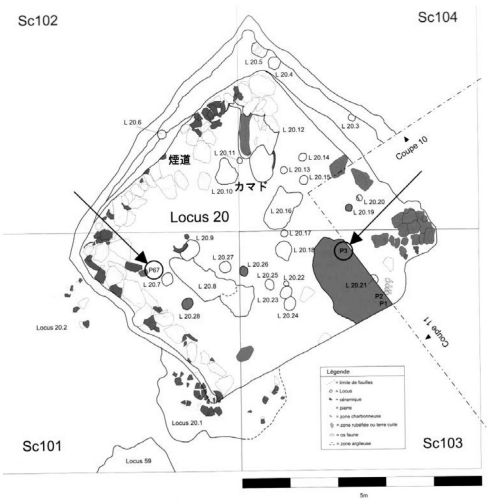


図４　ボロー遺跡２号住居址
（Ramseyer2013 Fig.5）

２号地点には，１辺約150ｍの方形土塁を持つ土城址が存在し，その北西隅の北側外に楕円形の盛土が２ヶ所確認され，その南側盛土上でⅡＦ１建物址が検出された。この遺構は9.9×6.6ｍの方形の半地下式で，盛土を掘り込み，床面は板石敷とし，壁に板石を立てる。その後，日干しレンガを積み上げ壁を形成する。内部は日干しレンガの壁で７室に区分される。中央に幅３ｍ程の部屋が区画され，その南北に中央室と直交する形で３室ずつ区画される。入口は東辺中央に設けられる。暖房施設は設けられていない。建物の方位は，長軸がやや東に傾く南北方向となる。上屋については，柱跡が確認できず不明であるが壁建ち構造であることは確かであろう。

両遺構内からともに匈奴土器が出土しており，匈奴時代の住居・建物址と考えられる。また，この他に，２号地点の方形土塁中央に位置する盛土部の試掘坑から，彩色のある壁土片が出土しており，この地点に壁建ちの建物が存在した可能性が高い。

③　モンゴル国セレンゲ県ボロー（Боро）遺跡（Ramseyer, Pousaz and Törbat 2009, Ramseiyer, D(ed) 2013：図４）

ボロー川に面する低段丘上に位置する。川沿いの500ｍの長さで遺跡が拡がる。スイス・モンゴル共同調査隊により発掘調査され，６基の住居址が検出された。いずれも方形の竪穴式住居である。４隅がほぼ方位に合い，規模も約５ｍ四方の25㎡前後と一定している。また，内部の構造も共通し，南東角にかまどが設けられ，そこから北・西壁に板石組の煙道が伸び，北西隅に煙り出しが置かれる。床には粘土が貼られ，柱穴・貯蔵穴も確認されている。カマド付近の床に磨り臼が設置される住居も存在する。入口は南東辺に設けられる。柱穴は，壁際，中央部，入口両側に配置されていた。また，入口の外側に通路が設けられた住居址も存在する。

④　ロシア連邦ブリヤート共和国バヤン・ウンデル（Баян Ундэр）遺跡（Danilov 2011：図５）

ジダ川に面した河岸段丘上に位置する，約100×70mの規模の方形土城址である。川に面する

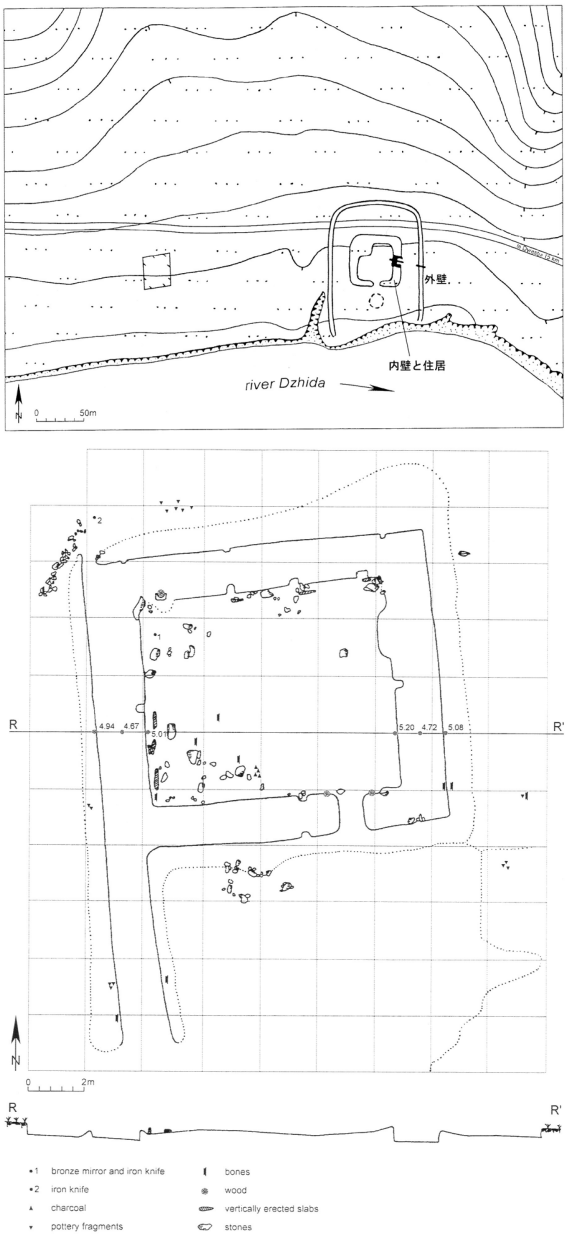


図５　バヤン・ウンデル遺跡

（Danilov 2009 Fig.1, Fig.2）

南面は崩落により土塁が失われている。内部に約50m四方の内郭を持つ。建物は内郭の北西隅に設けられ，北・西壁は土塁をそのまま利用している。約２mの厚さの土壁をめぐらし，外側で約12×10m，内部で約９×８mの規模を持つ，壁建ちの建物である。内壁には壁柱が配置される。柱は底に板石の礎板を置いた小土坑に立てられている。柱の配置から東西に棟をわたした切妻屋根が想定されている。また，屋内の北東隅にカマドが設けられ，北・西壁に板石組の煙道が回る。壁の南東部を切り入口を設けている。

内郭全体の構造は，居延などで確認されている城砦跡に類似しており，同様な機能をもつものと思われる。

⑤　ロシア連邦ブリヤート共和国イヴォルガ（Иволга）城址（Давыдова 1985, 1995:図６・７）

ブリヤート自治共和国の首都であるウラン・ウデ市の西南約16km，セレンゲ川支流のイヴォルガ川左岸の平坦な河岸段丘の縁辺に位置する土城である。４重の土塁と堀をほぼ方位に合わせて方形にめぐらし，外端で南北長248m，現存東西長194mの規模を持つ。東辺部は段丘崖に面しており，崩落している。1928年に発見され，その後，何度かの調査の後，1955年からダヴィドヴァ（A.B.Давыдова）を中心に本格的な発掘調査が開始され，1974年まで５回の調査が実施された。その結果，土城南西部のほぼ全域が調査され，発掘総面積は7000平米以上に達し，住居址，土坑（貯蔵穴），井戸，製鉄炉などの遺構が多数検出された。

住居址は54基が検出され，52基が竪穴式住居，２基が平地式住居であった。52基の竪穴式住

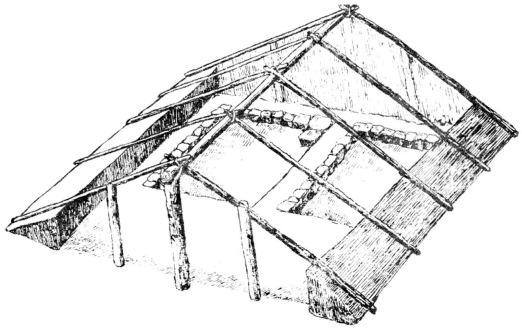
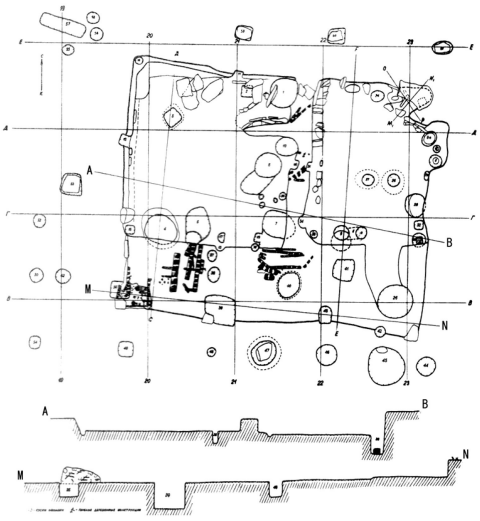


図６　イヴォルガ城址28号住居址
（Довыдова 1995 Таблица51・52）



居は，共通する特徴を有している。平面形は方形を呈す。北東隅にカマドを有し，そこから北壁，西壁沿いに石組の煙道が伸び，竪穴の南西隅から排煙する。煙り出しの煙道掘り込みが竪穴の壁に見られない住居もあるが，その場合は建物の壁に煙道を設置したと推定されている。南壁に入口が設けられ，そこに通路が付設されるものもある。柱穴は壁際，中央，入口の両側に配される。切妻屋根が想定されている。屋内の堆積状況から屋根には土葺きがなされていたと想定されている。東南部分に小柱穴が配列される住居があり，冬季の新生児家畜のための施設と考えられている。平面規模は2.8×3.2ｍから，6.85×6.65ｍまでと多様である。建物方位は，主軸がほぼ方位に合うものとやや東に傾くものに２分され，時期差を示すかもしれない。

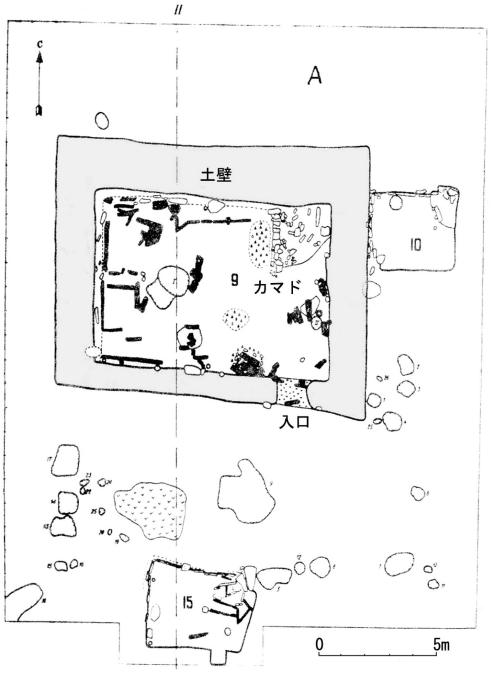


図７　イヴォルガ城址９号住居址
（Довыдова 1995 Таблица24）

特殊な住居として，28号住居址がある。この住居は近接する２つの竪穴の外側を柱穴列が方形に囲んでおり，上屋が共有されたと考えられる。それぞれの竪穴にはカマドが設けられ，壁柱もめぐることから別々の部屋として用いられたことは間違いない。竪穴と外側の柱列の間には空間があり，特に南側は幅２ｍに達することから，家屋内の空間として利用されたらしい。同様な複室構造の住居として14号住居が存在するが，竪穴の外側に柱穴をめぐらしてはいない。

通常の竪穴式住居においても，ほぼ同規模の住居が２棟並んで検出される例がみられる。遺構

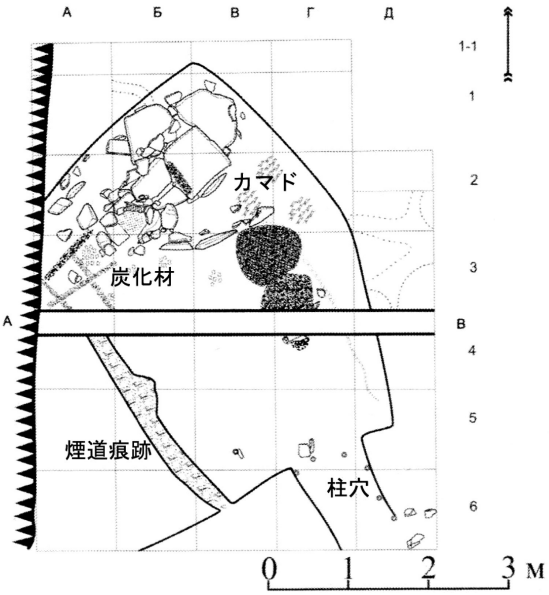


図８　ニジニー・マンギルトゥイ遺跡住居址
（Коновалов 他 2016 рис,2）

の切り合いは見られないので，同時に存在した可能性があり，複室構造の住居と同様な性格をもつものかもしれない。ただし，互いの屋根が接する距離に並ぶものもあり，建て替えの可能性も否定できない。

平地式住居は46ａ号住居と９号住居の２例が確認された。46ａ号住居は46号竪穴式住居に隣接して築かれ，柱穴列が確認されたが，暖房設備は持たない。夏季の簡易的な住居と考えられている。

９号住居は，城址中央の25×20ｍの方形の高まり上に建てられている。13×11.5ｍの方形で，日干し煉瓦積みの土壁による壁建ち構造を持つ。壁の厚さは約1.12～1.38ｍ。壁際に柱穴がめぐる。内部には，北東隅にカマド，北・西壁に煙道，南西隅に煙り出しが設けられる。入口は東南部に設けられている。床には貯蔵穴も設置されている。屋根・壁と思われる炭化建築材が多数検出された。北壁側にベンチ状の施設の存在も想定された。９号住居の南側には屋外炉が検出され，夏季に利用されたと考えられている。

なお，９号住居に接してで小型の竪穴式住居である10号住居址が建てられており，９号住居に付属する施設と考えられている。

⑥　ロシア連邦ブリヤート共和国ニジニー・マンギルトゥイ（Нижний Мангиртуй）遺跡（Коновалов 他 2016：図８）

ヒロク川の左岸の河岸段丘上に位置する。３基の住居址が確認され，2015年に１基が発掘された。この住居は谷状の部分の断面で確認され，南西部が自然崩落している。平面形が4.5×3.1ｍの不整方形の竪穴式住居である。北東隅に板石によるカマドを設置し，北・西壁に板石組の煙道をめぐらせる。南西部分は崩落のため煙道が壊れているが痕跡が確認されている。南東部に入口と通路を設ける。柱穴は入口と通路の部分に認められる。炭化した建築材が床面で確認され，切妻屋根と推定されている。

以上の例に加え，ロシア連邦ブリヤート共和国内のデュレニ（Дурены）遺跡では２基の竪穴式住居址が調査されている。また，モンゴル国トフ県テレルジ（Тэрэлж）城址では，瓦葺き基壇建物，同ゴアドブ（Гуа дов）城址では門址の発掘が行われている。しかし，いずれも詳細が不明なためここでは取り上げない。ただし，デュレニ遺跡の住居はイヴルガ城址との共通性が指

摘されているので，同様なものと考えてよいだろう。また城郭や定着的な集落，建物の発見例は，モンゴル北部からバイカル湖東部に集中しているが，これは本来の匈奴集団の分布域であり，拠点的な地域であったと考えられる。一方，アバカン居館址は，そこから離れた地域であり，匈奴国家の領域内において，広範に定着的な集落・城郭が建設された可能性を示している。特に，瓦葺建物は城郭内の中心的な建物とされており，周辺地のアバカンにおいても地域的な拠点の中心として使用されたものと思われる。

（2）建造物の特徴

以上の諸例から，匈奴の建物には平地式と竪穴式の２種類があることが確認された。また，建物を持つ集落・城址は河川に面した河岸段丘上の平坦地に立地することが一般的である。この２種の建物に共通する特徴とそれぞれの特徴は以下のようにまとめることができる。

共通する特徴
・平面形は方形で，おおむね主軸を南北方位に合わせた向きをとる。
・南側に入口を設ける。
・板石組のカマド・煙道などの暖房施設を設ける。煙道は板石を組み合わせた床より１段高いもので単道である。
・単室・複室の建物では，カマドは北東隅に設置され，北壁・西壁沿いに煙道がめぐる。西南隅から屋外に煙り出したと考えられる。
平地式の特徴
・土壁による壁建ち構造をとり，内壁に壁柱を持つ。
・竪穴式と比較して大型のものが多い。
竪穴式の特徴
・壁際に柱列をめぐらす。
・切妻式屋根を持つと推定される。
・床に貯蔵穴を設けるものが一般的である。

以上の建物の諸特徴を見ると，①アバカン居館址と②ザーン･ホショーⅡＦ１建物址を除くと，匈奴の建物については平地式・竪穴式の区別なく，室内空間の設計に一定の規範が存在することが明らかである。これらの建物は，出土遺物などから見て，生活空間であったと考えられる。平地式建物であるが，土城の付属施設である④バヤン・ウンデル遺跡や⑤イヴォルガ城址の９号住居址についても同様である。ただし，バヤン・ウンデル遺跡については兵営，イヴォルガ城址９号住居址については有力者の屋敷などの独自の性格が想定できるかもしれない。しかし，竪穴式･平地式の違いはあっても，住居建築の場合は同様な設計モデルにより内部空間が作られていると

考えてよいだろう。

一方，アバカン居館址の大型建物は，規模から見ても一般的な住居建物とは性格が異なると考えられ，多室構造，独特なカマドや煙道などの配置，瓦葺き屋根などの特徴もそのことを反映している。また，ザーン・ホショー遺跡ⅡＦ１建物址も多室構造で石敷やカマドの未設置など独特な特徴を持ち，やはり一般的な住居建物とは考え難い。特に，ザーン・ホショー遺跡ⅡＦ１建物址は，暖房施設も持たず，生活空間とは考えにくい。しかし，このような多室構造の建物は，内容の判明した類例が少く，役割・性格などの検討も難しい。テレルジ城址やゴア・ドブ城址などの建物址の詳細が公表された段階で，各遺跡個々の内容も含め，あらためて考察してみたい。

２．ホスティン・ボラク遺跡群KBS2遺跡の竪穴状遺構

(1) 遺跡の位置と現況

ホスティン・ボラク遺跡群KBS2遺跡は，ケルレン川に流入するズーン・バイダルガ川の左岸の平坦な段丘の縁辺に立地する。この段丘は，山麓からケルレン川に向かい南東方向にのび，川との比高は７～８ｍある。同じ段丘縁辺には，約４km上流に匈奴時代の製鉄工房址であるKBS1遺跡，約0.7km上流側にモンゴル・韓国共同調査隊が調査した匈奴時代の窯址が存在する。KBS １遺跡やモンゴル・韓国共同調査隊の調査成果も参考にすると，段丘上の広い範囲に匈奴時代の工房址が存在した可能性が高い。

KBS ２遺跡は，段丘崖の崩落面に炭化物・焼土の堆積が見られたことから確認された。周囲からは，瓦片・土器片も出土し，それらの特徴から，匈奴時代の窯址群である可能性が高いと考えられた。崖面を精査したところ，約100ｍの範囲に５ヶ所に炭化物・焼土の集中地点が見られ，西からK1～K5地点と命名した。発掘調査はK1地点で行った。

(2) 竪穴状遺構の発掘調査と特徴（図９）

発掘は，崩落部分に確認された遺構断面に対応し，東西４ｍ，南北８ｍの調査区を設定し，さらに調査区の北側に東西３ｍ，南北3.5ｍの拡張区を設定して，行った。

その結果，段丘端の緩傾斜面に掘削された南北約４ｍ，東西3.8ｍ以上のプランをもつ隅丸方形の竪穴状遺構であることが確認された。主軸は東に傾く南北方位をとる。南北壁の高さは北辺（北西部）で約60～70cm，南辺（南東部）で約10cm，西辺（中央南より）で約30cmである。北側では地山をそのまま床面としているが，南半部では，地山上に白色粘土を敷いた貼り床を設け，南端部では，長さ70～110cm，幅約２ｍの不整形な範囲で日干し煉瓦敷きを施している。日干し煉瓦敷の東半部は，２層からなるが，下層の煉瓦敷の方位は上層のものと異なり，その分布状況から，竪穴状遺構を掘削して床面を整形する際に，旧地形の小さな凹凸を埋める目的で充填されたものと推定される。床面は南北方向では北側から南側へ緩く傾斜するが，南半はほぼ水

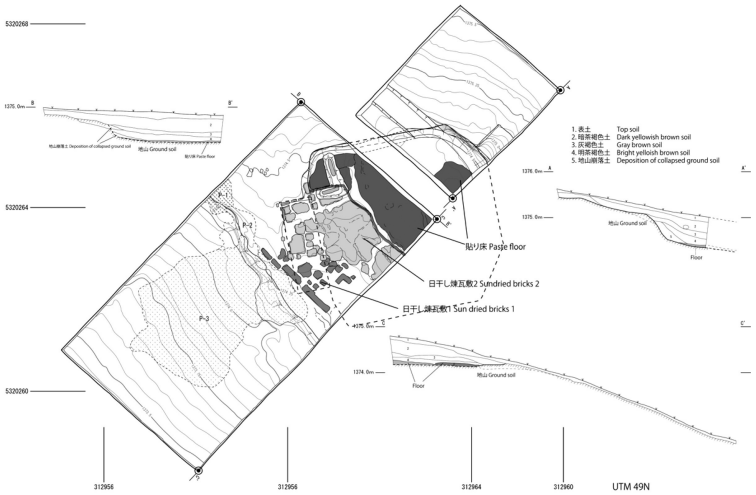


図９　KBS2遺跡竪穴状遺構

平に近い。さらに南端に長さ70cm，幅1.3m以上の突出部を形成し，その西端と南端は日干し煉瓦を縦に並べた見切り（縁取り）部分を付加している。また，遺構の南西隅近くで焼けた粘土塊が検出され，崩落した壁体の一部と考えられる。傾斜面に水平に掘りこんだため，遺構の南半は傾斜により竪穴の壁が低くなり，南端ではほとんど無くなるので，補足的に土壁を設けたものと思われる。ただし，周囲には火災の痕跡は認められず，後に壁だけが部分的に火を受けたものと推定される。また，柱穴については確認できなかった。

この竪穴状遺構ではカマドや炉，貯蔵穴などの付帯施設が確認されず，床面にも遺物が数点出土したのみであり，生活空間としての通常の住居とは異なる施設と思われる。しかし，埋土や床面からの出土遺物，さらに周辺に散布していた遺物もすべて匈奴時代のものであり，匈奴時代の遺構としてよい。

(3) 匈奴の住居建物との比較

前章で指摘した匈奴の建造物の特徴をこの遺構と比較し，この遺構が匈奴時代の建物である可能性を検証する。まず，貼り床・南側の入口の存在は，他遺跡の竪穴式住居の特徴と共通する。また，遺構の主軸がやや東に傾く南北方位であり，入口が南辺にとりつくことも共通している。南半で土壁を補足的に設けている点は，竪穴式住居の構築法に加え，一部平地式住居の手法も導入されているといえる。ただし，柱穴列が見られないため，上屋構造が不明で存在も確認できない点は，建物とする上で疑問が生じる点は否めない。しかし，イヴィルガ城址などの住居址においても柱穴が不明瞭な例が見られ，必ずしも柱穴列が必要とはいえないようである。さほど重量のない簡易的な建物であれば，堅固な上屋を想定する必要はなく，床上に柱を置く軽い上屋であった可能性もあろう。特に冬の居住を想定しなければ，保温に問題のあるこのような建物でも問題はない。南に入口を持つ点では，イヴォルガ城址で想定されているような，南北に妻をもつ切妻の上屋となる可能性がある。

以上のように本遺構についても住居と共通した特徴を持つ建物遺構として考えることができ

る。窯址との関連では，遺構内にロクロ設置用の土坑や粘土の貯蔵は確認できないため，土器成形の工房と断定はできない。出土遺物が少ないため，遺構の性格を特定することは困難であるが，おそらく，窯跡周辺に付設された操業に関わる施設であろう。住居址と同様な構造を持つことから，生活空間以外でも建物が用いられていたことは確実であるといえる。

３．匈奴の建物の系譜

匈奴で確認されている建造物の系譜については，中国からの影響が想定されることが多い。特に壁建ちの平地式住居については，アバカン居館址のように中国風の瓦が葺かれている例もあることから，中国的な建物と考えるのが一般的である。特にアバカン居館址については，発掘を担当し資料を紹介したエフチューホヴァ（Л.А.Евтюхова）やキセーリョフらの想定がそのまま継承され，中国や日本の研究者の間でも受け入れられている（角田1957，林2007等）。この考え方においては，建物の所有者，さらには建築に関わった技術者も，中国人とする傾向が強い。一方，キズラーソフ（Л.Р.Кызрасов）は壁建ちの構造，複雑な多室設計，地元の墳墓に共通する技術などを根拠に，そこに，近東やヨーロッパなどの西方の古代建築の影響が見られ，主に中央アジア系の工人が設計し，在地の工人も加わった建造物と考えており（Кызрасов 2001 p.65, 181），具体的には匈奴の攻勢により中央アジアに移動を余儀なくされた「月氏」の工人を想定している。

一方，竪穴式建物については，定住的な要素としてとらえられてはいるものの，必ずしも中国からの影響というようにはとらえられてはいない。そもそも，黄河流域では新石器時代から竪穴式とともに平地式建物が普及し，やがて主流となっていった（田中 1998）。漢代ではすでに平地式が一般的で，複雑な高層建築や宮殿建築も存在するので，漢代の中国建築と直接結びつけにくいためであろう。当時，近隣で竪穴式住居が普及していたのは，極東地域（中国の東北部，ロシア極東地域，朝鮮半島）であり（大貫 1998 p.255-258），ブロヂャンスキー（Д.Л.Бродянский）はイヴォルガのカマド付き竪穴式住居について，ロシア極東・中国東北部からの影響の可能性を指摘している（Бродянский 1985 p.49）。この点については，イヴォルガ城址の調査者であるダヴィドヴァも肯定的にとらえている（Давыдова 1985 p.22）。

匈奴の建造物については，これまで，発掘例が必ずしも多くなかったことから，平地式建物についてはアバカン居館址，竪穴式住居についてはイヴォルガ城址が代表例として取り上げられてきたが，事例が増えた現段階では，個々の建物の特徴を基により広範に検討する必要があろう。なお，平地式建物については，居館址や城砦址のように一般的な住居建築の範疇からはみ出す部分があること，またそれぞれが異なる地域からの影響が想定されていることから，以下では平地式建物と竪穴式建物を個別に検討していくこととする。

(1) 平地式建物

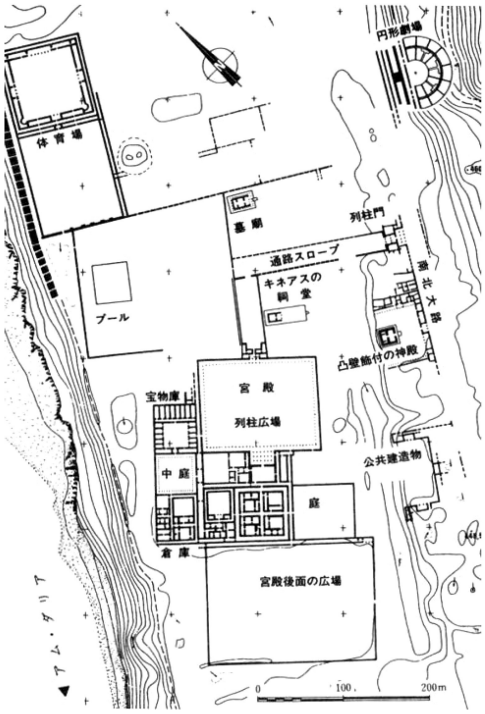
平地式建物については，中国とより西方からの影響という２説に分かれている。しかし，キズ

ラーソフが中国的ではないとした壁建ち構造であるが，木製の柱・梁による木造構架建物の成立は戦国～前漢期ころと考えられており（田中 1980 p.181），それ以前に主流であった版築・塼積みなどの壁で屋根組を支える構造は，前漢代の宮殿・民家・軍事施設などにおいても引き続き多くの建物に用いられている。例えば，壁建ちで内部に壁柱を用いる構造は長安城武庫（中国社会科学院考古研究所 2005）や，未央宮中央官署遺跡にもみられる（劉・李 2003 p.89-94）。河南省三楊荘遺跡では，土壁建ち瓦葺建物が農村の民家として用いられている（河南省文物考古研究所・内黄県文物保護管理所 2004，劉 2012）。バヤン・ウンデル遺跡にみられる囲壁と一体となった建物も三楊荘遺跡や居延の城砦遺跡（籾山 1999 p.45-78，張 2016）で見られるものと同様である。アバカン居館址のように瓦の使用が見られることを考慮しても，中国式の建築の影響を考えて問題はないだろう。

ただし，アバカン居館址のように壁で細かく内部を仕切る多室構造については，漢代の中国建築では明確な例を欠いている。居延の城砦などで居住区内の部屋が細かく仕切られている例も存在するが（籾山 1999 p.51，張 2016），このように内部が整然と配列されているわけではない。画像石等にみられる漢代の平地建物にも，このような例は確認できない。この点では，キズラーソフの指摘を考慮する必要があろう。

では，キズラーソフの想定する中央アジアに類例を見出せるであろうか。キズラーソフが具体的な類例として挙げたのは，オリエントの都市国家ウルやマリ，アナトリアのウラルトゥなどの建物であり（Кызрасов 2001 p.89-94），中央アジアとは地理的にも離れ，また匈奴とは数百年以上の時間差があるため，直接の類例とするには問題がある。キズラーソフの主張するヨーロッパ・西アジアの建築との関連性でいえば，アレキサンダー東征後に中央アジアに定着したギリシア人によるヘレニズム期の建造物が参考になろう。特に匈奴の時代と重なるグレコ-バクトリア王国期に注目したい。バクトリア王国は紀元前３世紀中頃に建国され，紀元前２世紀半ばころに北方の遊牧系集団の侵入により消滅した。この遊牧系集団を月氏と考える説もあり（小谷 1999 p.91），西遷後の大月氏の領域にバクトリアの地が含まれることも確かである。その後，大月氏の中から，北インドまで領域を広げたクシャン王国が成立した（小谷 1999 p.94-113）。バクトリア王国の代表的遺跡が，現在のアフガニスタン領内に位置するアイ・ハヌム遺跡である（加藤 2013 p.74-129，小野塚 2016：図10左）。

アイ・ハヌム遺跡は，前３世紀初めころのセレウコス朝期に創建され，バクトリア王国期に機能した都市遺跡であり，前145年頃に廃絶されたと見られる。ピャンジ（アム・ダリヤ上流部）川と支流のコクチャ川に面し，西辺と南辺が川に東辺は丘陵となる三角形状を呈する。現存する宮殿は前２世紀に再建されたものと考えられている。西側中央に，宮殿などの主要な建造物が集中する。宮殿内部は，北側の列柱式広間から大玄関を抜けると，広間に続いて４つの区画があり，行政施設と考えられている。その西側に中庭と複数の部屋からなる居住区画がある。さらに西には，宮殿の付属施設が設けられ，中央の内庭の南北に２つの区画があり，出土遺物から図書館・



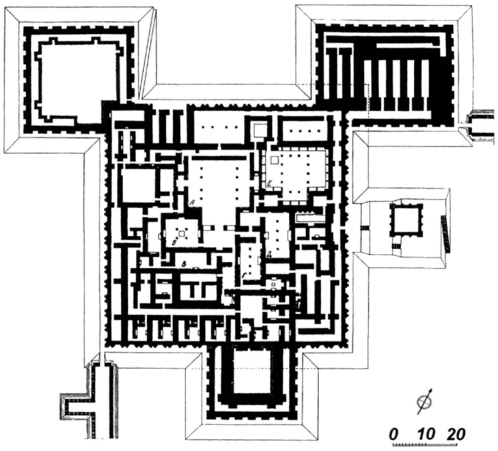


図10　アイハヌム遺跡とトプラク・カラ宮殿

左　小谷　1999　挿図５，
右　ルトヴェラゼ2011　p.38図

宝物庫・倉庫と想定されている。宝物庫を例にとると中央の内庭の周囲に長方形の小室を配する構造となっている。建物の壁は日干し煉瓦と焼成煉瓦を用いて積まれ，屋根は平らであると推定されている。

この他に，匈奴の時代に近い例として，アム・ダリヤ下流域のホラズムの都市トプラク・カラの宮殿がある（マッソン 1970 p.171-203，ルトヴェラゼ 2012 p.33-39:図10右）。ホラズムは紀元１世紀に独立国家となり，トプラク・カラを首都とし，４世紀初頭ころまで使用した。トプラク・カラは長方形の輪郭を持つ囲壁都市であり，その北西隅に宮殿が建てられた。宮殿の出土遺物はおおむね３世紀に年代つけられている。宮殿は本来２階建てであったが，２階部分は僅かにしか残存していなかった。内部は，儀礼のための広間，王族の居住区，倉庫，使用人の居室，作業場など様々な区画が設けられていた。広間を中心に部屋が配される点はアバカン居館址とも共通している。

ここでは比較的時代が近く，かつ内容が詳しく明らかにされている例を挙げるにとどめたが，中央アジアでは，前2000年紀以降，日干し煉瓦・土積による壁建ち・多室構造の建物が普及していたことが確認されており，匈奴の時代にも一般的であったものと思われる。アバカン居館址に中国系の建築技術が応用されていることは確かであるが，一方で中央アジア的な要素についても一考する必要があることは確かである。

(2) 竪穴式

竪穴式の類例となる極東におけるカマド付き住居については，その出現そのものに戦国～漢代の中国からの影響が存在したと考えられ（大貫 1989 p.150-162），極東に固有に発生した後に，そこから匈奴に伝播したとは断言できない。そのため，完全に中国から匈奴への直接の影響の可能性も排除しうるものではない。

ただし，漢代では中国で竪穴住居はすでに一般的ではない点を考慮する必要がある。同時代の中国北部の事例については河北省徐水東黒山遺跡の漢代住居が参考になる（南水北調中線干線工程建設管理局他　2014:図11）。現在の北京市にも近く，戦国時代以来，遊牧系の集団と近接した地域といえる。ここでは，前漢～後漢期の方形の住居が22基発見された。いずれも浅い掘り込みを持つ半地下式とでもいうべき構造であり，半地式，浅穴式と表現されている。ただし，土積みの壁を持つので，純粋な竪穴式住居とは言い難い部分もある。しかし，壁際にL字状に煙道を持つ例や，同規模の建物が隣接する例が存在し，イヴォルガ城址など匈奴の竪穴式住居と共通する特徴が見られる。カマドや煙道の位置が一定せず，煙道が２条になるなどの違いも見られる。ただし，報告者は，前漢前期はL字状の煙道で，中・後期には一方の壁に接する直線状となり，煙道は２・３条になることを指摘しており，匈奴の住居には前期の建築の影響があると考えられる。全体としては類似点が多く，中国の北部の住居建築の影響を排除できない。ただし，徐水東黒山遺跡の所在地は戦国時代の燕国の領域内で，東北地域や草原地域との接触も多い地域であり，ここの事例がいわゆる中原地域の典型となるわけではない。中国の東北地域・極東に広く普及した住居設計が匈奴に取り入れられたと考えることもできよう。しかし，その類似性から見て，徐水東黒山遺跡のような中国北辺からの直接的影響の可能性は高いと考える。

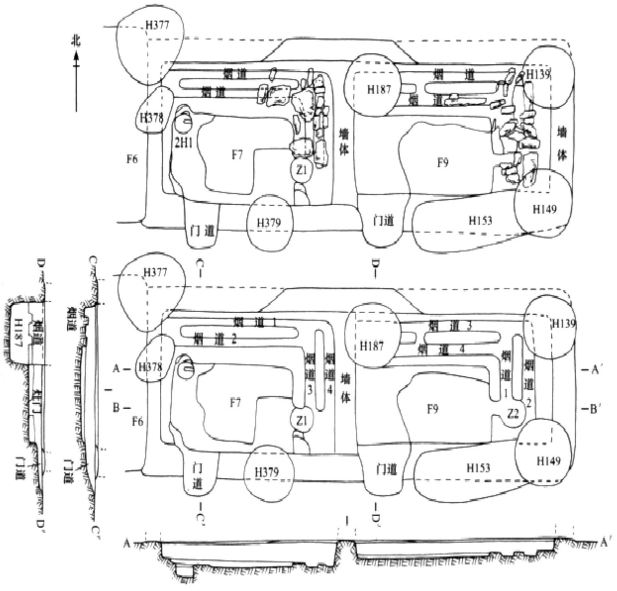


図11　徐水黒山遺跡Ⅱ区F7・F9住居址（前漢前期）
南水北調中線干線工程建設管理局他2014図二〇

4. 史料に見る匈奴の都市・建築

前漢の司馬遷『史記』匈奴列伝に「逐水草遷徙，毋城郭常処耕田之業」とあるように，匈奴において都市や定住集落は存在しないと思われてきた。しかし，考古資料では上記のようにその考えが覆されている。一方で『史記』では匈奴領内の「城」と呼ばれる城郭都市の記事が散見され，何らかの建築が

設けられていた。そこで，以下に史料に見える前漢代の匈奴の「城」について述べる。なお，史料出典として中華書局版『史記』『漢書』を用いた。

①穨当城

『史記』巻93，韓信列伝 「信之入匈奴，与太子俱。及至穨当城，生子，因名曰穨当。」

韓王信は息子とともに匈奴に亡命した。穨当城に至ったところで子供が生まれたので穨当（たいとう）と名付けた。穨当城は冒頓単于の時期に匈奴領内に存在した。

②趙信城

『史記』巻110，匈奴列伝「其明年春，漢謀曰，翕侯信為単于計，居幕北，以為漢兵不能至。乃粟馬発十万騎，負私従馬凡十四万匹，糧重不与焉。令大将軍青，驃騎将軍去病中分軍，大将軍出定襄，驃騎将軍出代，咸約絶幕擊匈奴。単于聞之，遠其輜重，以精兵待於幕北。与漢大将軍接戦一日，会暮，大風起，漢兵縦左右翼圍単于。単于自度戦不能如漢兵，単于遂独身与壮騎数百潰漢圍西北遁走。漢兵夜追不得。行斬捕匈奴首虜萬九千級，北至闐顔山趙信城而還。」

『史記』巻111，衛青列伝「遂至寳顔山趙信城，得匈奴積粟食軍。軍留一日而還，悉焼其城余粟以帰」

前漢武帝の元狩四年（前119年）の春，衛青と霍去病を派遣してゴビの北にいる匈奴単于を討たせた。この遠征のおり闐顔山の趙信城に至っている。なお趙信城は南朝宋代の『史記集解』巻一百十匈奴列伝に「信前降匈奴，匈奴築城居之。」とあり，趙信が匈奴に降服した際に城を築いてそこに住まわせたという。趙信城に至った衛青は匈奴の貯蔵していた粟（穀物）を得て兵士に与え，残りを焼いている。このとき衛青が率いた軍勢は，騎馬五万，歩兵数十万というから，趙信城にはかなりの穀物（もみ）が貯蔵されていたことがわかる。

③范夫人城

『漢書』巻九四上，匈奴伝「貳師将軍将出塞，匈奴使右大都尉与衛律将五千騎要擊漢軍於夫羊句山狹。貳師遣属國胡騎二千与戦，虜兵壊散，死傷者数百人。漢軍乗勝追北，至范夫人城」

武帝の征和三年（九〇年），貳師将軍の李広利が五原から出撃して匈奴の右大都尉と衛律を破り范夫人城に至った。その後，李広利はさらに進軍して郅居水（セレンゲ河）を渡っている。『漢書』応劭の注に「本漢将築此城。将亡，其妻率余衆完保之，因以為名也。」とあり，范夫人城はもともと漢の将軍が築いたものを将軍が死亡したのち夫人が守ったために范夫人城と呼ばれたとある。またおなじく『漢書』の注に張晏曰くとして「范氏能胡詛者。」とあり，范夫人は匈奴のシャーマンであったとされる。五原から郅居水（セレンゲ河）の間に位置したことがわかる。

④単于城

『漢書』巻七〇，陳湯伝「（郅支単于）遂西奔康居。…発民作城，日作五百人，二歳乃已。…明日，前至郅支城都頼水上，離城三里，止営傅陳。望見単于城上立五采幡織，数百人披甲乗城，又出百余騎往来馳城下，歩兵百余人夾門魚鱗陳，講習用兵。城上人更招漢軍曰闘来。百余騎馳赴営，営皆張弩持満指之，騎引卻。頗遣吏士射城門騎歩兵，騎歩兵皆入。延寿，湯令軍聞鼓音皆薄城下，

四面囲城，各有所守，穿塹，塞門戸，鹵楯為前，戟弩為後，卬射城中楼上人，楼上人下走。土城外有重木城，従木城中射，頗殺傷外人。外人発薪焼木城。夜，数百騎欲出外，迎射殺之。初，単于聞漢兵至，欲去，疑康居怨己，為漢内応，又聞烏孫諸国兵皆発，自以無所之。郅支已出，復還，曰，不如堅守。漢兵遠来，不能久攻。単于乃被甲在楼上，諸閼氏夫人数十皆以弓射外人。外人射中単于鼻，諸夫人頗死。単于下騎，伝戦大内。夜過半，木城穿，中人卻入土城，乗城呼。時康居兵万余騎分為十余処，四面環城，亦与相応和。夜，数犇営，不利，輒卻。平明，四面火起，吏士喜，大呼乗之，鉦鼓声動地。康居兵引卻。漢兵四面推鹵楯，並入土城中。単于男女百余人走入大内。漢兵縦火，吏士争入，単于被創死。軍候仮丞杜勳斬単于首，得漢使節二及谷吉等所齎帛書。諸鹵獲以畀得者。凡斬閼氏，太子，名王以下千五百一十八級，生虜百四十五人，降虜千餘人，賦予城郭諸國所發十五王。」

前漢末，匈奴は東西に分裂し，西匈奴の郅支単于は西に移動し康居に至り，都賴水（タラス河）のほとりに城を築いた。この城は郅支城または単于城と呼ばれるが，一日五百人を使役して二年がかりで築かれた。単于城は土城の外側に二重の木城（二重に木柵をめぐらしたものか）を備え，土城には土を突き固めた城壁，楼閣，大内（宮殿）があった。土城内には単于のほか，閼氏，太子，名王以下千五百一十八人がいたことが史料からわかる。

⑤龍城（龍城）

『史記』巻110，匈奴列伝「歳正月，諸長小会単于庭，祠。五月，大会蘢城，祭其先，天地，鬼神。」

『漢書』巻94上，匈奴伝「将軍衛青出上谷，至龍城，得胡首虜七百人。公孫賀出雲中，無所得。公孫敖出代郡，為胡所敗七千。李広出雁門，為胡所敗，匈奴生得広，広道亡帰。」

匈奴には年に三回大きな集会があり，夏五月に先祖・天地・鬼神を祭る場所を蘢城と呼ぶ。ここには祭祀に関する建物があったと思われる。上谷から出撃した衛青が龍城に至っている。そのほか公孫賀は雲中から出撃して戦果なし，公孫敖は代郡から出撃して七千の兵を失って敗退，李広は雁門から出撃して敗退。危うく匈奴に捕らえられそうになって逃げ帰った。以上のことから蘢城（龍城）は上谷から長城を出て比較的近いところにあったと思われる。

このように史料中にも前漢代に城郭･定住集落が築かれ，恒常的な建物が存在した記録がある。特に④単于城は，康居の地に築かれたことがわかるが，康居は中央アジアのシル川周辺に存在したと推定されており，匈奴と中央アジアのつながりを示す史料である。また，②趙信城，③范夫人城のように，漢人による建造とする記録もあり，漢の設計･建築技術が導入されていたことが，史料からもうかがえる。

おわりに

匈奴の遺跡で確認されている建物遺構については，平地式と竪穴式，さらに居館・城砦や一般

住居においても中国建築の影響が強い可能性は高いと考えられる。匈奴時代の城郭や定着的集落の建設に，中国の設計・技術が導入されたものと考えてよいだろう。一方，中国建築以外の影響の存在もうかがえ，各地域の個々の建築についても周辺地域との広い比較を含めたより詳細な検討が必要である。

今回は主に住居建築を取り上げたが，それらは匈奴領内においてきわめて斉一的な特徴を有しており，国家経営上の必要から，何らかのモデルが匈奴国家によって組織的かつ意図的に選択され，領内に普及した可能性が考えられる。建造物に用いる瓦等の建材や，領内に広く分布した匈奴式の土器についても同様な特徴が認められ（Кубарев,В.Д., А.Д.Журалева, 1986），同様な観点から検討していく必要がある。さらに，個々の集落・城郭の機能・目的を，それぞれの遺物や遺構の内容に基づいて，詳細に検討していく必要があり，今後の課題としたい。

本稿は，JSPS KAKENHI（Grant Number JP26244048），平成26年度私立学校振興共済事業団学術研究振興基金，平成26年度札幌学院大学研究促進奨励金（重点）SGU-J14-202002-01「初期遊牧国家における窯業生産経営の解明と歴史的意義」による成果の一部である。

参考文献

（露文）

Данилов,С.В., Т.В.Жавранoвка, 1995, Городище Баян Ундер - Новый памятник Хунну Забайкалье, Культуры и помятники бронзового и раннего железного веков Забайкалья и Монголии, p.26-36, Улан-Уде

Довыдова,А.В., 1985, Ивлгинский конплекс-памятник хунну в Забайкалье, Москва

Довыдова,А.В., 1995, Ивлгинский археологический конплекс, том1(Ивлгинское городище), Санкт-Петербруг

Киселев, С.В., 1951, Древняя история Южной Сибири, Москва

Коновалов П.В., Б.А.Вазаров, Д.А.Миягашев, А.М.Клементьев, и Н.В.Именохоев, 2016, Хуннская археология в Бурятии : история и новый этап исследований, Вестник Бурятского научого центра Сибирского отделения Российской академии наук №1(21), p.9-29, Улан-удэ

Кубарев,В.Д., А.Д.Журалева, 1986, Керамическое производство хуннов Алтая, Палеоэкономика Сибири, p.101-111, Новосибирск

Кызласов, Л.Р., 2001, Гунский дварец на Енисее, Москва

Лбова, Л.В., Е.А. Хамзина, 1999, Древности Бурятии - Карта археологических помятников, Улан-Уде

Хамзина, Е.А., 1982, Археологические памятники Бурятии, Новосибирск

（英・仏文）

Danilov,S.V., 2009, Preliminary results of the invistigations on a Xiongnu settlement in Mongolia. Current Archaeological Research in Mongolia;Papers from the First International Conference on “Archaeological Research in Mongolia” held in Ulaanbaatar August 19th-23rd 2007, p.241-246, Bonn.

Danilov,S.V., 2011, Typology of ancient settlement complexes of the Xiongnu in Mongolia and Transbaikalia. Xiongnu Archaeology;Multidisciplinary Perspectives of the First Steppe Empire in Inner Asia, p.129-136, Bonn.

Ramseiyer, D(ed)2013, L’habitat Xiongnu de Boroo gol Recheches archeologiques en Mongolie(2003-2008), Gollion

Ramseiyer,D., N.Pousez, and Ts.Törbat, 2009, The Xiongnu settlement of Boroo gol, Selenge aimag, Mongolia,

Current Archaeological Research in Mongolia;Papers from the First International Conference on "Archaeological Research in Mongolia" held in Ulaanbaatar, August 19th-23rd, 2007, p.231-240, Bonn.
Houle,Jean-Luc., L.G.Broderick, 2011, Settlement Patterns and Domestic Economy of the Xiongnu in Khanui Valley, Mongolia, Xiongnu Archaeology;Multidisciplinary Perspectives of the First Steppe Empire in Inner Asia, p.137-152, Bonn.
Kidder, T.R., Liu Haiwang, and Li Minglin, 2011, Sanyangzhuang;early farming and a Han settlement preserved beneath Yellow River flood deposits, "ANTIQUITY" 86　issue 331, p.30-47, London

（中文）
張　鳳　2011「秦漢時期農業文化与游牧文化集落的比較研究」『考古』2011-1，P.77-84
張文平　2016「遮虜障，居延都尉府及居延県」『草原文物』2016-2，p.95-100
中国社会科学院考古研究所　2005『漢長安城武庫』文物出版社
河南省文物考古研究所･内黄県文物保護管理所　2004「河南内黄県三楊庄漢代庭院遺址」『考古』2004-7，p.34-37
劉慶柱・李毓芳　2003『漢長安城』文物出版社
南水北調中線干線工程建設管理局・河北省南水北調中線干線工程建設領導小組弁公室・河北省文物局　2014『徐水東黒山遺址発掘報告』科学出版社
内蒙古自治区文物考古研究所･蒙古国游牧文化研究国際学院　2015「蒙古国達欣其楞蘇木詹和碩遺址発掘簡報」『草原文物』2015-2，p.8-25
潘　玲　2007『伊沃尔加城址和墓地及尔相関匈奴考古問題研究』科学出版社

（邦文）
岩村　忍　2007『文明の十字路＝中央アジアの歴史』講談社
ヴァインシュテイン S.I.・M.V.クリュコフ　1985「「李陵の宮殿」，あるいは一つの伝説の終わり」『ユーラシア』新２号，p.2-22，新時代社
江上波夫　1950「匈奴の住居」『ユーラシア古代北方文化』，p.39-79，山川出版社
大貫静夫　1989「極東における平地住居の普及とその周辺」『考古学と民族誌』，p.146-171，六興出版
大貫静夫　1998a『東北アジアの考古学』世界の考古学⑨　同成社
大貫静夫　1998b「考古資料から見た東北の竪穴住居」『先史日本の住居とその周辺』，p.67-93，　同成社
小野塚拓造　2016「第２章　アイ･ハヌム」『黄金のアフガニスタン　守りぬかれたシルクロードの遺宝』, p.30-35, 産経新聞社
加藤九祚　2013『シルクロードの古代都市　―アムダリヤ遺跡の旅』岩波書店
香山陽坪　1970『騎馬民族の遺産　北ユーラシア』沈黙の世界史⑥　新潮社
小谷仲男　1999『大月氏　中央アジアに謎の民族を尋ねて』東方田中暎郎　1993「モンゴル建築史から見たゲル」『遊牧民の建築術　ゲルのコスモロジー』，株式会社INAX
田中　淡　1982「先秦時代宮室建築序説」『東方学報』（京都）第52冊，p.123-197
田中　淡　1998「中国黄土高原の穴居」『先史日本の住居とその周辺』，p.167-178，同成社
中国社会科学院考古研究所・奈良文化財研究所　2011『漢長安城桂宮　報告編』奈良文化財研究所学報第85冊
角田文衛　1957「所謂『李陵の邸宅址』について」『古代学』第６巻第１号（角田1971所収）
角田文衛　1971『増補　古代北方文化の研究』新時代社
林　俊雄　2007『スキタイと匈奴　遊牧の文明』興亡の世界史②　講談社
林　俊雄　2009『遊牧国家の誕生』世界史リブレット98　山川出版社
平井尚志　1951「イエニセイ河中流に遺る古代中国の住居址」『考古学雑誌』第37巻第２号，p.36-40
マイダル，D　1988『草原の国モンゴル』新潮社
マッソン，V　1970『埋もれたシルクロード』岩波書店
護　雅夫　1955「南シベリアにおける漢代の建築址」『北方文化研究報告』第10冊（護 1997所収）
護　雅夫　1997『古代トルコ民族史研究Ⅲ』山川出版社
劉　海旺　2012「河南省内黄県三楊荘集落遺跡の発見」『愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター河南省文物考

古研究所研究協定締結記念　第10回アジア歴史講演会　洪水に沈んだ漢代集落―河南省内黄県三楊荘集落遺跡の発見―』
ルトヴェラゼ，エドヴァルド　2011『考古学が語るシルクロード史　中央アジアの文明・国家・文化』平凡社

Buildings in Xiongnu Empire

USUKI Isao, SAGAWA Masatoshi and MATSUSHITA Kenichi

Abstract

At various places in the Xiongnu nomadic Empire in Eurasian steppe, walled settlements and villages, which are inconsistent with nomadic life style, were constructed. This paper intends to show contents of Xiongnu buildings and to clarify the process in which they were introduced to the Xiongnu Empire.

Xiongnu buildings are classified into the flat-land type and the pit type. The flat-land type was influenced by Chinese architecture of Han dynasty, and in addition it may have been influenced by Central Asian architecture. Meanwhile, the pit dwelling seems to have been influenced by the architecture of the northern boundary of China. It was confirmed that some articles on the introduction of architectural technology from China and the relation of architectural technology between Xiongnu Empire and Central Asian area exist in historical materials. It seems that Xiongnu Empire systematically and intentionally carried out such introduction of technology for the management of the empire.

Key words：Xiongnu, nomadic state, sedentary settlement, building

（うすき　いさお　札幌学院大学人文学部教授）
（さがわ　まさとし　東北学院大学文学部教授）
（まつした　けんいち　愛知学院大学文学部准教授）